

外国雑誌センター館活動評価(2009年度版)

外国雑誌センター館活動評価(2009年度版)では、外国雑誌センター館(以下「センター館」という。)の活動について、従来どおり「レア・ジャーナル¹の収集」と「文献複写サービスの提供」を中心に分析・評価を行った。

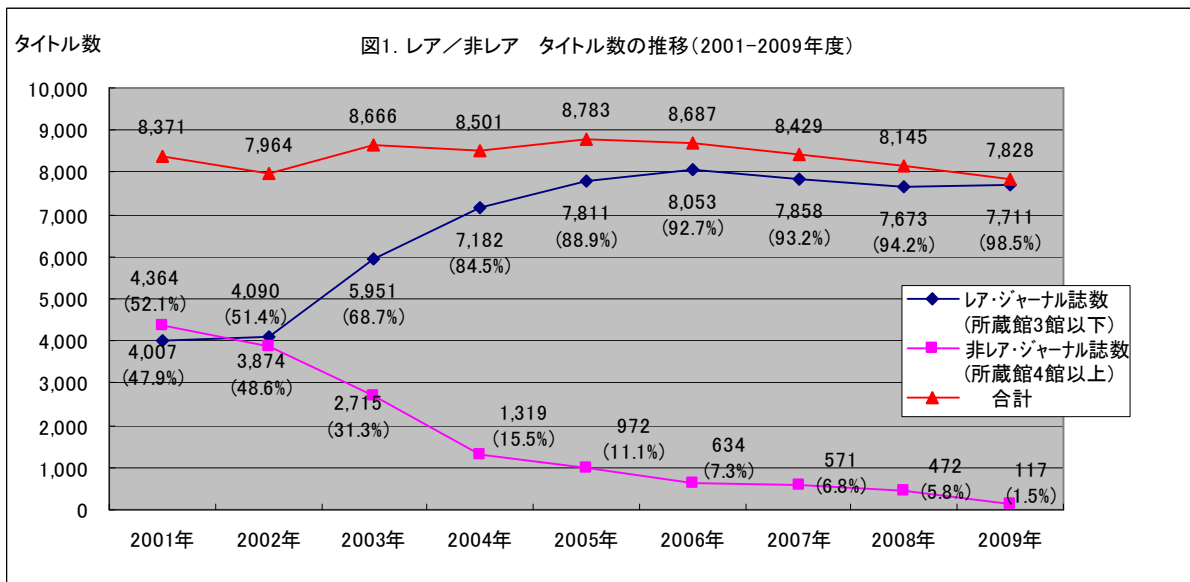
分析・評価にあたっては、各センター館から提出されたデータを集計し、センター館全体の過去9年間の活動の推移をまとめて、それを基に分析を行っている。

なお、センター館のNACSIS-ILLシステム(以下「ILLシステム」という)経由の文献複写サービスのデータは、国立情報学研究所(以下「NII」という。)の協力により毎年提供を受けており、各年4月現在のものである。その他のILLシステム関係のデータは、NIIがホームページで公開しているNACSIS-ILL統計情報に依っている。

1. レア・ジャーナルの収集について

(1) 所蔵館数別タイトル数の推移

毎年の雑誌購読価格上昇を受け、センター館誌数は2005年度をピークに漸減しているが、レア・ジャーナルの減少割合は小さい。今年度は昨年より若干増加した。センター館誌全体に占めるレア・ジャーナルの割合は、2001年度以降ずっと増加を続け、2009年度は98.5%と所蔵雑誌のほぼすべてがレア・ジャーナルとなった(図1)。



¹ 「レア・ジャーナル」とは、収集が困難あるいは国内の継続所蔵館数が3館以下の外国雑誌とする。

(2) タイトルの中止と新規購入

センター館では 2005 年度²以降も毎年、タイトルの 5～7%(所蔵数比)を中止し、新規タイトルの購入を行っている(表 1)。その結果、(1)で述べたように所蔵タイトルのほとんどがレア・ジャーナルで占められるに至った。また、レア・ジャーナルについても、毎年タイトルの中止を行っている(表 1)。これは、各館とも継続して、雑誌の利用状況を見ながら購入タイトルの検討・入れ替えを行っているためである。

なお、外国雑誌の契約手続きは年単位であり、所蔵館増加による購入中止の検討開始から実際の中止までに複数年が必要となるため、今後も非レア・ジャーナル全点の中止は難しいと思われる。

表 1. 新規タイトル数・所蔵館数別中止タイトル数の推移(2005-2010 年度)

	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年
中止 レア・ジャーナル (所蔵 3 館以下)	166	465	433	581	302	323
中止 非レア・ジャーナル (所蔵 4 館以上)	446	177	109	135	122	127
中止 合計	612	642	542	716	424	450
新規タイトル数	761	665	396	491	239	

*2010 年新規タイトル数は調査時点では未定であった。

(3) 電子ジャーナルの購入

電子ジャーナルの普及に伴い、従来は冊子体を中心であったレア・ジャーナルについても電子化されるものが増えてきた。そのため、今年度初めてセンター館誌の電子ジャーナルの契約状況について調査を行った。

2009 年度のセンター館誌 7,828 誌中で、電子ジャーナルのみを契約しているのは 117 誌、冊子だけで契約可能であるが電子ジャーナルも追加して契約しているものは 63 誌である。電子ジャーナルの契約形態にはさまざまな種類があり分類・カウントが難しいが、今後も方法を検討し調査したい。

以上の結果から、センター館は国内未収集の外国雑誌の収集・整理において十分な役割を果たしているといえる。また、今後もしばらくは収集誌数・中止数に大きな変化はないと予想されるが、収集誌の形態は電子ジャーナルが増加する可能性が考えられる。

2. 文献複写サービスの提供について

(1) ILLシステム経由文献複写サービスの全般的な利用動向

ここでは、NACSIS-ILL 文献複写サービス全般の利用について傾向を述べる。データは、NII ホームページ上の「NACSIS-ILL 統計情報」に依る。

① NACSIS-ILL システム参加機関・参加組織数

2008 年度末の NACSIS-ILL システム参加機関数は、国立大学は 86 校(国立大学の 100%)*、公立大学 81 校(全公立大学の 90.0%)*、私立大学 539 校(全私立大学の 91.5%)*、短大、高専、その他 377 機関である。また、直接のサービス単位である参加組織総数は、私立大学・その他の機関が若干増加し、

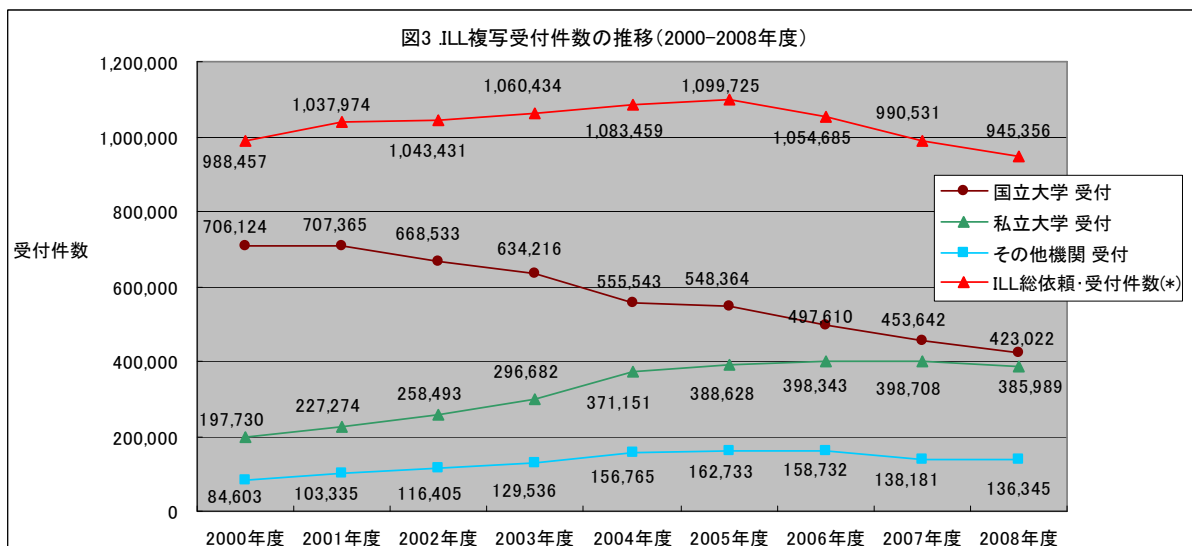
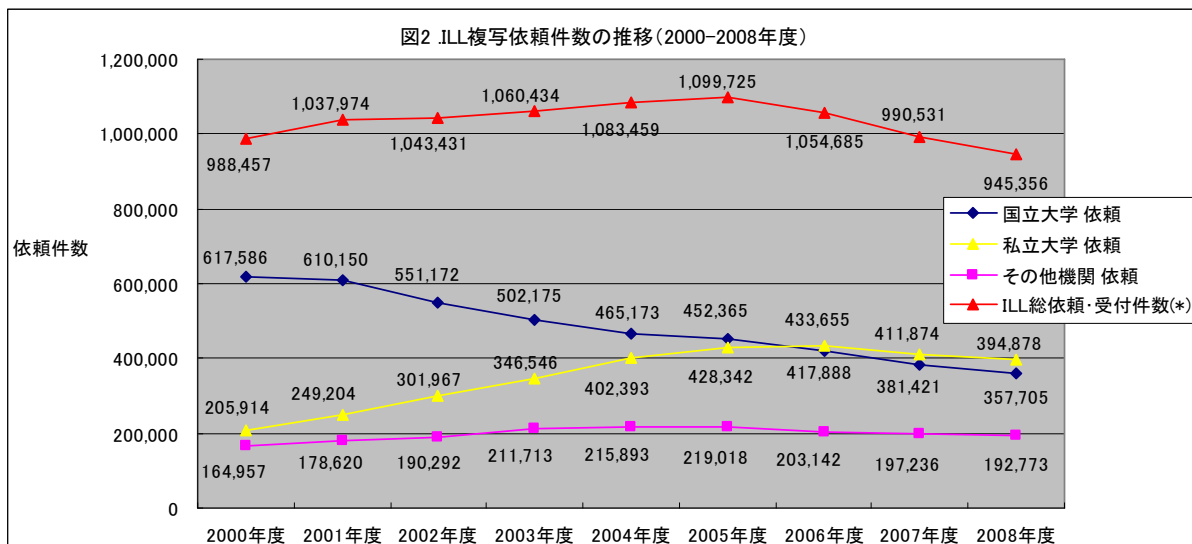
² センター館では、2001 年 7 月に「外国雑誌センター館資料収集方針」を申し合わせ、より効率的・効果的な収集を目指し、2001 年度から 2005 年度の 5 年間をかけて収集誌の整理・見直しを行った。

合計 1,554 組織である。（*：設置母数は文部科学省の学校基本調査による）

② ILL システム経由の依頼・受付件数について

2006 年度以降、複写の総依頼・受付件数は減少している。国立大学の受付件数も 2001 年度以降減少を続け、2008 年度はピーク時(2001 年度)の 59.8%となった。

なお、2006 年度以降、依頼件数は私立大学が国立大学を上回ったが、受付件数では逆に国立大学が私立大学を上回っている。国立大学が文献複写サービスに大きな役割を果たしていることが分かる(図 2・図 3)。



(*：「NACSIS-ILL 統計情報」では、依頼件数には謝絶件数を含めていない。そのため、総依頼件数と総受付件数は等しい。)

(2) 文献複写サービスにおけるセンター館の機能

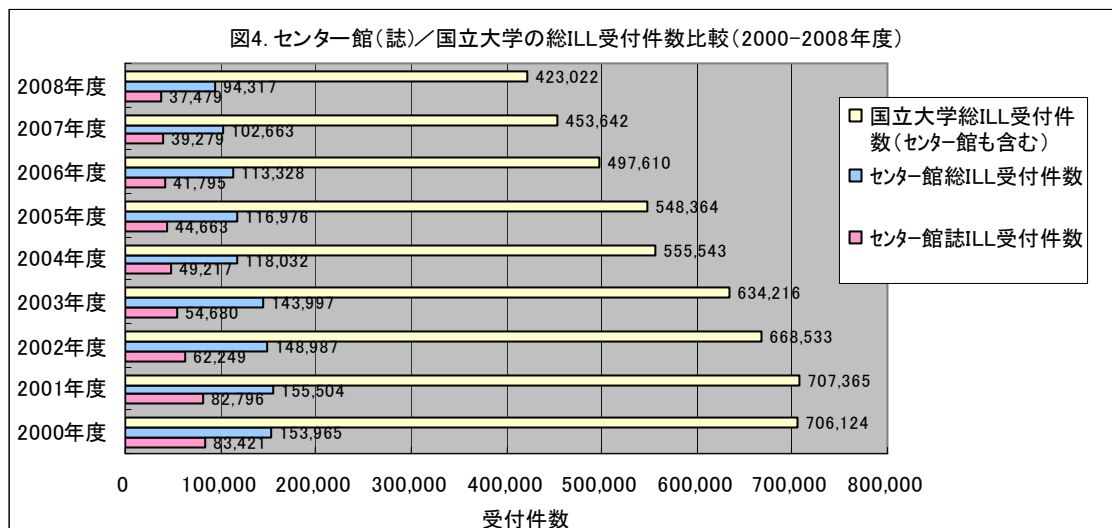
ここでは、センター館の文献複写サービスについて他の機関と比較し、特徴を述べる。

① ILL システム経由の受付件数について

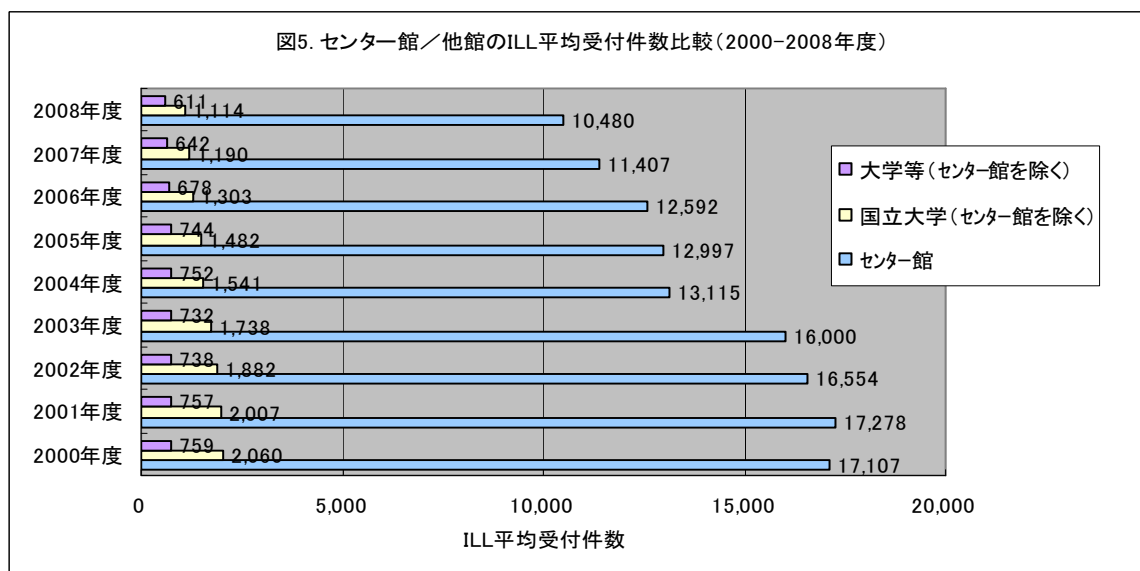
ILL システム経由の受付件数・傾向に関しては、2000 年度以降ほぼ同じ傾向を示している。

センター館の ILL システム経由受付件数は国立大学の総受付件数と同様に減少し、2008 年度はピーク時(2001 年度)の 60.7%となっている。

国立大学総受付件数におけるセンター館受付件数の割合は、2000 年度以降常に 20%以上であり、2008 年度は 22%である。また、レア・ジャーナル誌数が増加した 2003 年度以降、センター館の受付件数の約 40%がセンター館誌に対する申し込みである。(図 4)



次に、平均複写受付件数を、大学等(センター館を除く国公立大、短大、高専、大学共同利用機関)、国立大学(センター館を除く)及びセンター館の3者で比較する。2008 年度末のILLシステム参加組織数は大学等³1,348、うち国立大学(センター館を除く)は 293、センター館は 9 である。3者では1参加組織あたりの平均受付件数に大きな開きが見られる。センター館1館あたりの複写受付件数は、2000 年度以降常に他の国立大学 8 倍以上であり、2006 年度以降は約 9.5 倍である。(図 5)

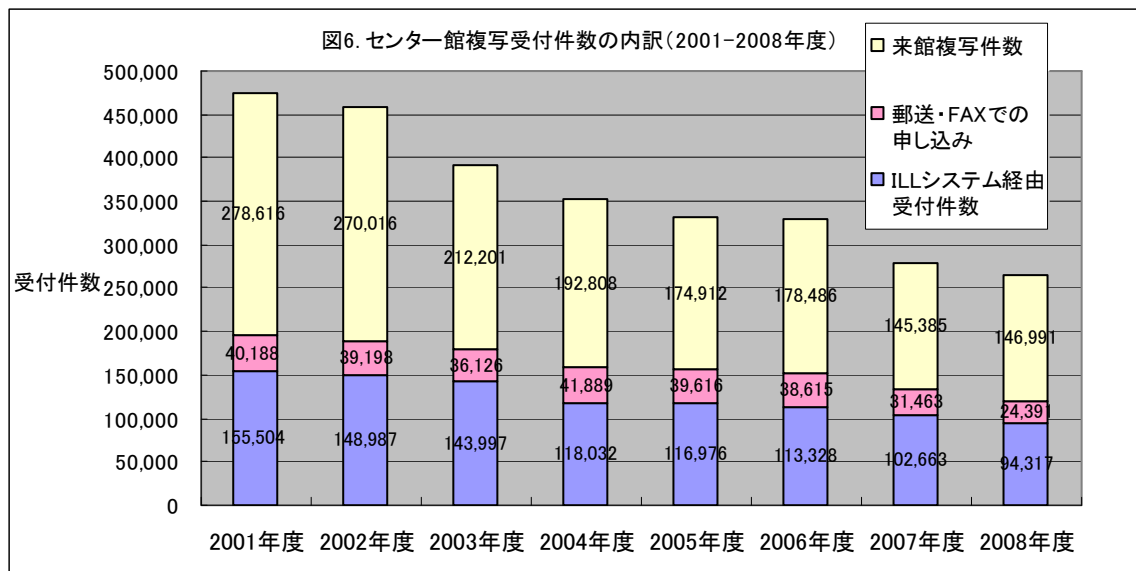


以上の結果から、9 館から構成されるセンター館は、学術機関等における ILL 文献複写サービスにおいて中核的な役割を担っていることが裏付けられる。

³ 大学等：国公立大学、短期大、高専、および大学共同利用機関

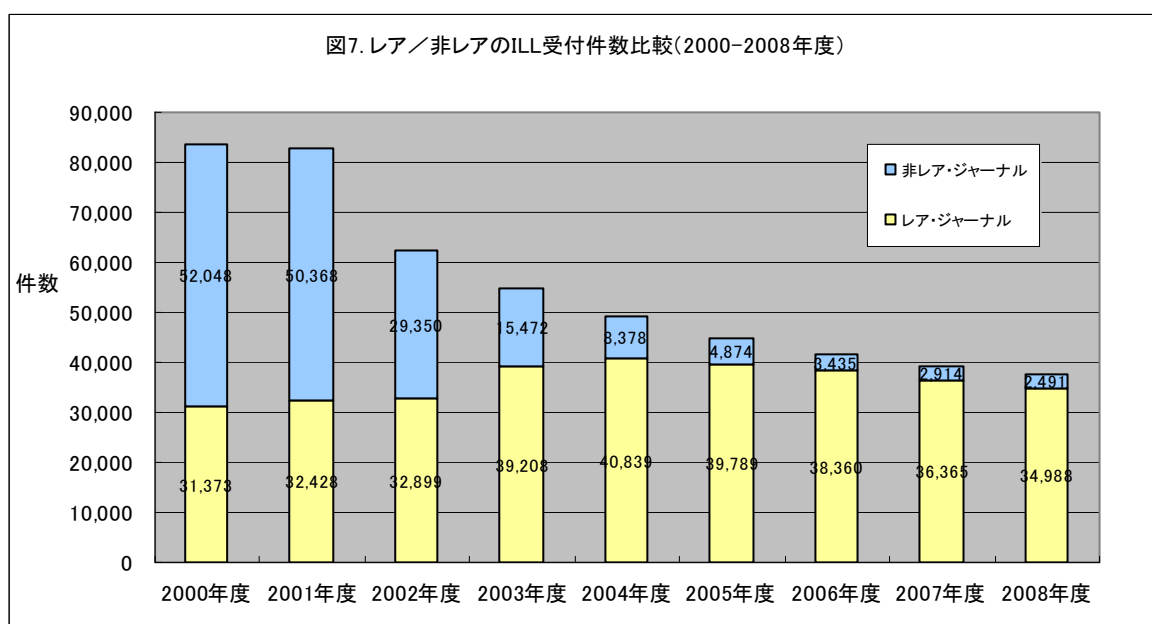
②ILL システム経由以外の受付について

ILL システム経由以外の方法(郵送、FAX、来館利用)によるものは、毎年センター館総受付件数の60%を超えている。(図6) また、郵送・FAXによる複写受付の割合は2000年度以降毎年9%前後である。センター館誌が NACSIS-ILL システムに参加しない機関等の研究者にも、広く利用されていることが分かる。



③ILL システム経由文献複写サービスにおけるレア・ジャーナルの利用

センター館におけるILLシステム経由複写受付件数は、レア・ジャーナルについても2004年度以降若干減少している。しかし、複写受付件数に占めるレア・ジャーナルの割合は毎年上昇している。2000年度36.7%であったが、2003年度には71.7%、2008年度には93.4%となった。これは「1. レア・ジャーナルの収集について」で述べたセンター館誌に占めるレア・ジャーナルの割合とほぼ連動する。レア・ジャーナルの提供がサービスの中核となっており、また、センター館の収集・整理活動が利用者サービスに効果的に結びついていることがうかがえる。(図7)



以上の結果から、センター館ではレア・ジャーナル中心の資料収集と多様な利用者への文献複写サービスの提供機能を十分に果たしているといえる。

3. 今後のセンター館サービスについて

以上のように、現在センター館は「国内未収集の外国学術雑誌等を体系的に収集・整理し、国内外研究者等に提供する」という本来の機能について一定の成果を収めている。現在の収集方針に基づくセンター館誌収集²が確立した2005年度以降は「レア・ジャーナルの収集」、「文献複写サービスの提供」とも安定してほぼ同じ傾向を示している。

しかし、今後はレア・ジャーナルの電子化により、収集媒体の変化や契約方法の多様化などの変化が進み、それに伴い各種サービスの提供についても大きく変化することが予想される。また、センター館を含め多くの大学図書館において、電子ジャーナルを含む雑誌購入費の高騰が大きな問題となっている。

外部環境の変化に対応し、収集した外国学術雑誌による学術雑誌利用のロングテールを実現するためのセンター館の努力は不可欠である。